

15, 6 世紀 ポルトガル王国における 黒人奴隷制 (1)

——近代奴隷制の歴史的原像——

布留川 正 博

目 次

はじめに

I 中世後期の地中海世界における奴隷制

- 1 イタリア商人の奴隷貿易活動
- 2 イタリア諸都市国家における奴隷制
- 3 イベリア半島における奴隷制
- 4 砂糖産業と奴隷制

II 大西洋奴隷貿易の開始

- 1 ポルトガルのアフリカへの進出
- 2 初期の奴隷貿易の形態
- 3 大西洋奴隷貿易の制度化
- 4 輸入奴隷数と王室収入 (以上, 本号)

III 黒人奴隷制の成立

- 1 奴隷の地域的分布
- 2 奴隷の就業形態
- 3 奴隷の生活状態

IV 結びにかえて——比較史的検討

は じ め に

「新世界」における奴隷制, とりわけ, 黒人奴隷制成立の諸条件を抉り出すためには, その成立に主導的役割を果たしたヨーロッパ諸国側の歴史的な政治経済的諸条件ばかりでなく, それが成立した現地における自然的・社会的諸条件, ならびに, 黒人奴隷を供給したアフリカ側の社会的諸条件を総体的視角か

ら有機的に結合する必要がある。すなわち、環大西洋国際的連関のなかに「近代奴隷制」¹⁾ 成立の諸条件を求めなければならないのである。

このなかでも、とくに、第1点のヨーロッパ側の歴史的諸条件は、それが奴隷制成立にとって中心的役割を担ったがゆえに、第一義的な考察対象となる。換言すれば、ヨーロッパの近代資本主義が、なぜ「新世界」の当該地域での労働収奪形態として奴隷制を選択したのか、という問題である²⁾。これを考察するための前提として、ヨーロッパが奴隷制という選択肢を歴史的に自らの社会内部に抱えていたかどうか、問題となる。すなわち、ヨーロッパは、「新世界」で奴隷制が形成される以前に、それを経験していたのであろうか、という疑問である。

この点で想起されるのは、古典古代のギリシア・ローマにおける奴隷制である³⁾。しかし、この古代奴隷制は、一般に、ローマ帝国解体以降、完全に衰退した、と信じられてきた。これは、西欧世界全般の歴史的傾向としては正しいにしても、中世のヨーロッパにおいて奴隷制が存在しなかったとする見解は、誤りである。

- 1) 池本幸三氏は、単線的発展段階論者からみれば、古典古代の支配的生産様式たる奴隷制と、西欧近代の資本主義生産様式とを結び付けることは、アナクロニズムに映るかもしれないが、16世紀から19世紀までの約400年の長期にわたる環カリブ海地域（カリブ海諸島を包含しながら、ブラジル北東部からメキシコ湾岸を北上し、北アメリカチェサピーク湾までの地域を指す）における歴史的現実を踏まえれば、近代が奴隷制を創出したことは明らかであり、したがって、これを「近代奴隷制」と呼ぶことを提唱している（池本幸三『近代奴隷制社会の史的展開——チェサピーク湾ヴァージニア植民地を中心として——』ミネルヴァ書房、1987年、2-72ページ）。
- 2) 宮野啓二氏は、奴隷制研究の新たな課題として、「近代資本主義と奴隷制との関連の問題」があることを指摘したうえで、次のように述べている。「従来の研究が主に近代奴隷制の前近代的性格の究明に向けられてきたが、それと同時に奴隷制が一国内であれ、世界市場であれ、資本主義といかに『接合』または癒着していたかの両者の複雑な構造的関連の解明が必要となってきた」（宮野啓二「南北アメリカの奴隷制」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望——社会経済史学会創立50周年記念——』有斐閣、1984年、21ページ）。
- 3) 古代奴隷制に関する研究には枚挙にいとまがないが、とりあえず次のものをあげておく。M. I. Finley (ed.), *Slavery in Classical Antiquity: Views and Controversies*, London: Lowe & Brydone, 1960 (M. I. フィンレイ編、古代奴隷制研究会訳『西洋古代の奴隷制——学説と論争——』東京大学出版会、1970年。太田秀通『奴隷と隷属農民——古代社会の歴史理論——』青木書店、1978年。土井正興『古代奴隷制社会論——地中海世界における階級闘争——』青木書店、1984年。

「アナル派」の創始者のひとりマルク・ブロックは、ゲルマン人のローマ帝国内への侵入後、双方とも戦闘の過程で獲得した捕虜を奴隷としたこと、また、フランク王国では少なくとも8世紀まで奴隷制が存続したことを指摘している⁴⁾。フィリップス・ジュニアの最近の研究では、フランク王国においては、奴隷制から農奴制への移行がヨーロッパのなかでもっとも急速に進展したが、それでも家内奴隷や技能奴隷は、9世紀以降も存続した、とされている⁵⁾。また、同研究のなかで、イギリスでは、1066年のノルマン人の征服以前まで奴隷制が存続し、それ以降、急速に消滅したこと、スウェーデンでは、1335年になってはじめて、キリスト教徒である奴隷の子孫は、生まれながらにして自由である、とする布告が出されたことが、触れられている⁶⁾。一般に、北部・中部ヨーロッパにおいては、奴隷制は、10世紀以降、急速に衰退したと思われる。

ところが、南部ヨーロッパ＝地中海世界では、中世後期(12～15世紀)に至っても、奴隷は、根強く残存した、というよりも、むしろ再生強化されたのである。「アナル派」第2世代のフェルナン・ブローデルは、当時「奴隷制は、地中海社会の構造的特徴であった」と述べている⁷⁾。イタリア諸都市国家内での奴隷制、あるいは、その支配下にあった地中海島嶼における奴隷制、また、イスラム教圏と境界を接するイベリア半島における奴隷制、これらが、この時代における代表的なものであった。こうして、ヨーロッパ、とくにその先駆となったポルトガル、スペインが、いわゆる「大航海時代」に乗り出していく時期に、奴隷制は、地中海世界において強固に根付いていたのである。

しかも、ポルトガルが、アフリカへ進出していく過程で着手された大西洋奴

4) M. Bloch, *Slavery and Serfdom in the Middle Ages*, translated by W. R. Beer, Berkeley: Uni. of California Press, 1975, pp. 2-3. M. Bloch, *La Société Féodale*, Paris: Éditions Albin Michel, 1939 (M. ブロック著、新村猛他訳『封建社会』1, 2, みすず書房, 1973-77年) 1, 227-244ページ。

5) W. D. Phillips, Jr., *Slavery from Roman Times to the Early Transatlantic Trade*, Minneapolis: Uni. of Minnesota Press, 1985, pp. 54-56.

6) *Ibid.*, p. 58.

7) F. Braudel, *The Mediterranean and the Mediterranean World in the Age of Philip II*, Vol. I, II, translated by Siân Reynolds, New York: Harper & Row, 1972, Vol. II, p. 755.

隷貿易は、本国へ大量の黒人奴隷をもたらした。こうして、15世紀から16世紀にかけて、ポルトガル王国のいたるところに黒人奴隷が存在し、奴隷主の支配下で種々の仕事に使役されていた。サンダースの最近の研究⁸⁾は、これを見事に実証している。おそらく、スペインにおいても、半世紀ほど遅れてではあるが、同様の事態が進行したであろう。したがって、スペイン、ポルトガルが、「新世界」の当該地域を植民地化する過程で、ひとつの労働形態として奴隷制、とりわけ、黒人奴隷制を採用する歴史的前提条件が、その直前に形成されていたと言える。もとより、「新世界」の奴隷制は、イベリア半島の形態がそのまま踏襲されたわけではないが、

ところで、研究史的にみれば、先に触れた「アナル派」のブロックやブローデルが、中世における奴隷制の存在をつとに指摘していたことは、大いに評価できるとしても、かれらの問題意識のなかには、それと「新世界」の奴隷制との史的連関という視角が希薄であったと思われる。この点では、ベルギー出身の学者フルリンデンが出色である。かれは、中世後期の地中海世界と「新世界」の奴隷制のあいだの連続性を強調した⁹⁾。もう少し広げて言えば、地中海世界におけるヨーロッパ人の歴史的経験の延長線上に「新世界」での植民地事業を捉えようとしたのである¹⁰⁾。しかし、かれの場合、歴史の連続性を強調するあまり、逆に、「新世界」の奴隷制の質的転換に関しては、軽視する結果となっている。

翻って、わが国における研究状況をみると、管見の限りでは、中世ヨーロッパの奴隷制を主題的に取り扱った論稿は少なく、とくに、「新世界」の奴隷制との関係で中世の奴隷制を捉えようとする論稿は、ほとんど皆無に近いと言え

8) A. C. de C. M. Saunders, *A Social History of Black Slaves and Freedman in Portugal 1441-1555*, Cambridge: Cambridge Uni. Press, 1982.

9) C. Verlinden, *The Beginnings of Modern Colonization: Eleven Essays with an Introduction*, translated by Yvonne Freccero, Ithaca: Cornell Uni. Press, 1970. このなかには、1953年から1967年までに発表された論文が収められている。また、これ以外に、“Italian Influence in Iberian Colonization,” *The Hispanic American Historical Review*, Vol. 33, No. 2, May 1953, 199-211, がある。

10) こうした歴史の連続性の指摘は、奴隷制のほか、植民地統治の方法、土地所有制度、植民地社会の経営方式など多岐にわたっている。

よう。その例外のひとつとして、児島秀樹氏の論稿¹¹⁾があげられる。氏は、このなかで、大西洋奴隷貿易の前史を探るという視角から、中世地中海世界の奴隷貿易ならびに奴隷制と甘蔗栽培との関係を、主としてフルリンデンの資料に依拠して展開されている。筆者も、依拠した資料は多少異なるものの、氏とほぼ同じ主題を取り扱ったことがある¹²⁾。ほかにも、中世の奴隷制に関して触れている論稿は存在する¹³⁾が、総じて、この主題に関する研究が、わが国においてブラックボックスとなっていることは、ほぼ間違いないまい。

本稿は、こうした空白部分を幾分なりとも埋めようとするひとつの試みである。その主題は、15, 6世紀に確立したポルトガル王国における黒人奴隷制の実態に肉迫することである。それは、近代奴隷制の歴史的原象を探るという視角から必然的に導出された主題のひとつである。その際、中世後期の地中海世界における奴隷制という歴史的コンテキストのなかにこれを位置づける必要があろう。また、「新世界」の奴隷制との比較を可能な限り試みたい。依拠した研究資料は、すでにあげたフルリンデン、フィリプス・ジュニア、サンダースの研究が主なものであるが、その他の研究資料については、その都度注記する。

I 中世後期の地中海世界における奴隷制

1 イタリア商人の奴隷貿易活動

中世後期(12～15世紀)に地中海世界に広がっていた奴隷制は、イタリア人、とくにヴェネツィア商人ならびにジェノヴァ商人の活動を抜きにしては考えら

11) 児島秀樹「中世地中海世界の奴隷貿易と砂糖黍栽培——大西洋奴隷貿易論史——」『大学院研究報』(中央大学経済学・商学研究科篇)第13号Ⅱ, 1984年3月, 55-67ページ。

12) 拙稿「砂糖産業の西漸運動と黒人奴隷制の成立——「新世界」における奴隷制砂糖プランテーションの歴史的的前提——」『経済学論叢』(同志社大学)第39巻 第3号, 1988年3月, 192-224ページ。

13) 管見の限りでは、次の研究がある。伏島正義「部族法典にみる奴隷について」『歴史学研究』第454号, 1978年3月, 1-21ページ。永井一郎『『ウェールズ法』のカイスについて』『国学院経済学』第28巻 第1号, 1980年3月, 27-58ページ。清水廣一郎『中世イタリア商人の世界——ルネサンス前夜の年代記——』平凡社, 1982年, 97-101ページ。松本栄三「古代ロシア国家と奴隷貿易」『一橋論叢』第72巻 第6号, 1974年12月, 102-118ページ。斎藤寛海「中世後期のターナにおける奴隷売買の実態」『信州大学教育学部紀要』第33号, 1975年, 65-79ページ。

れない。かれらは、地中海全域に貿易拠点を開発し、精力的な商業活動を行っていた。ちなみに、十字軍の遠征は、イタリア人の財政的支援を受けると同時に、かれらの商業活動を拡張するのに寄与したのである。

ところで、奴隷貿易は、こうしたイタリア商人の商業活動の重要な一部であった。マクニールは、「奴隷貿易は、研究者たちが近年まで認識していた以上に、はるかに重要な役割を演じた」と述べている¹⁴⁾。12世紀末から13世紀初めにかけて、イタリア商人は、西地中海の北アフリカやイベリア半島南部に貿易拠点を創設し、奴隷貿易活動を営んでいた。

この時期に獲得された奴隷の大半

は、イスラム教徒（ムスリム奴隷）であった。ジェノヴァの奴隷市場は、12世紀末ころにひとつのピークを迎えていたようである。第1表をみると、サンプル数58人のうち過半数がムスリム奴隷であった。しかも、女子の方が男子よりも多かったことがわかる。

イスラム教徒を主流とする奴隷調達のパターンは、ジェノヴァだけでなく、他のイタリア諸都市国家においても同様であった。少なくとも13世紀の第3四半紀まで、ムスリム奴隷は、全奴隷人口の約4分の3を占めていた¹⁵⁾。その大部分は、イベリア半島でのいわゆるレコンキスタの過程で獲得された捕虜たちであった。たとえば、1230年代のアラゴン王国によるバレンシアのレコンキスタでは、多数のイスラム教徒が捕えられ、イタリアの諸都市に運ばれたことが、

第1表 ジェノヴァで売買された58人の
奴隷の出自 (1186-1226年)

出 自	男子奴隷数	女子奴隷数
イスラム教徒*	17	13
サルディニア人	3	10
コルシカ人	1	—
ギリシア人	—	1
不 詳	2	11
計	23	35

〔備考〕 *イスラエム教徒30人の中に、黒人男子が3人、黒人女子1人が含まれている。

〔資料出所〕 Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 103, によって作成。

14) W. H. McNeil, *Venice: The Hinge of Europe 1081-1797*, Chicago: The Uni. of Chicago Press, 1974 (W. H. マクニール著、清水廣一郎訳『ヴェネツィア——東西ヨーロッパのかなめ、1081-1797——』岩波現代選書、1979年)、68ページ。

15) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 104.

知られている。

しかし、13世紀の第4四半紀に、奴隷調達地域は、劇的に変化した。それ以前の1204年に、ラテン人がコンスタンティノープルを征服し、ラテン帝国を創設して以降、イタリア商人は、自由に黒海周辺に進出することが可能となった¹⁶⁾、13世紀後半には、ジェノヴァ商人が、黒海沿岸地域での貿易の主導権を握った。かれらは、クリミア半島のカフファやドン川河口のタナに貿易拠点を設け、また、貿易上の要衝となるコンスタンティノープルから金角湾の対岸にあるペラにも砦を築いた¹⁷⁾。

こうして、13世紀末から15世紀中葉にかけて、奴隷調達のための主要拠点は、黒海周辺に移動した。カフファ在住のジェノヴァ出身の公証人ランベルト・デ・サンプチュートは、1289年の5月から8月までの4ヶ月間に、合計30人の奴隷売買契約を記録した¹⁸⁾。これによると、奴隷の大半は、チェルケス人であって、しかも、10才前後の子供が多く、男女の数はほぼ同じであった。カフファには、このサンプチュート以外に27人の公証人がおり、また、登記しない取引もあったと思われるので、年間取引総数は、1,000人を下らなかったと考えられる。タナやペラにおいても、おそらくカフファよりも人数は少ないであろうが、奴隷取引が行なわれた。

黒海周辺で取引された奴隷の多くは、アレクサンドリアに送られ、マムルーク軍の奴隷部隊の一員になるための訓練を受けた。ある推計によると、1420年代にカフファからエジプトに船で送られた奴隷数は、毎年2,000人にものぼった¹⁹⁾。あるいは、オットマン・トルコの宮廷奴隷となったり、貴族の妾となる

16) それ以前にも、イタリア商人、とくにヴェネツィア商人は、黒海周辺で貿易活動に携っていたが、ビザンティン帝国は、ボスポラス海峡を航行する船舶にたいして、商品関税を徴収した(マクニール, 前掲訳, 48ページ)。

17) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 104; マクニール, 前掲訳, 50ページ。

18) Verlinden, *op. cit.*, (*The Beginnings*), pp. 84-87; 清水廣一郎, 前掲書, 98ページ。

19) マクニール, 前掲訳, 69ページ。フルリンデンによると、20~30才の男性奴隷約2,000人が、毎年エジプトに送られた、とされている。その出自は、タタール、チェルケス、ギリシア、アルバニアなどであった。また、カイロでは、常に5,000~6,000人の奴隷が、軍隊の訓練を受けていた(Verlinden, *ibid.*, pp. 92-93)。

奴隷もいた。それ以外の大部分は、イタリア諸都市国家や地中海島嶼に送られた。

2 イタリア諸都市国家における奴隷制

古代ローマ帝国の時代から17世紀ころまで、イタリアの諸地域には奴隷制が存在していたことが知られている。8世紀から11世紀にかけて、東ヨーロッパのスラブ系諸族の奴隷をババリア地方からアルプスを越えてヴェネツィアまで運び、そこからさらにビザンツ帝国やイスラム教圏に送る通商ルートが確立していた²⁰⁾。ヴェネツィアは、奴隷貿易の通商ルートの要衝の地として栄えていた。ちなみに、ラテン語の奴隷 (*sclavus*) は、元来スラブ民族を意味していた²¹⁾。

中世後期のイタリアでは、すでに触れたように、当初ムスリム奴隷が主流であったが、その後黒海周辺の諸族が主流となった。そして、14世紀中葉に全ヨーロッパを席卷した黒死病による人口激減のために、労働力が払底し、奴隷需要が増加した。1363年にフィレンツェ当局は、非キリスト教徒の奴隷を外部から無制限に導入することを許可した²²⁾。1366年7月から1397年3月までにフィレ

第2表 フィレンツェで売買された357人の奴隷の出自 (1366-1397年)

出 自	人 数
タ タ ー ル 人	274
ギ リ シ ア 人	30
イ ス ラ ム 教 徒	22
ロ シ ア 人	13
ト ル コ 人	8
ボスニア人またはスラブ人	5
チェルケス人	4
ク レ タ 人	1
計	357

〔資料出所〕 Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 150, に
よって作成。

20) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 61. なお、これ以外の主要な奴隷貿易ルートは、ふたつあった。ひとつは、東ヨーロッパから、ドイツ、フランスを通り、スペインのコルドバまでのルートで、もうひとつは、イギリスから海路で直接コルドバに向かうルートであった。

21) フランス語の *esclave*, スペイン語の *esclavo*, ポルトガル語の *escravo*, ドイツ語の *Sklave*, 英語の *slave* は、すべてこのラテン語に由来する。

22) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 105; 清水廣一郎, 前掲書, 98ページ。ただし、ヴェネツィアは、逆に1366年に奴隷の導入を禁止した。

ソツェで売買された357人の奴隷に関する公式記録(第2表)をみると、全体の77パーセント(274人)がタタール人であり、さらに特徴的なことは、全体の92パーセント(329人)が女子であった。奴隷の大部分は、雑多な家事労働に従事する家内奴隷であった。

第2表のサンプル数は、かなり小さいものの、この時期の奴隷調達地域は、黒海周辺が中心であったことがわかる。

ともあれ、いわゆるルネサンス期のイタリアには、奴隷制は、広範に存在していたのである。上流市民のあいだでは、家内奴隷、とくに女子奴隷を所有することが、なかば常習となっており、また、その奴隷たちが、主人の子を宿すことは、まれな出来事ではなかった。1414年から23年までの時期にヴェネツィア市場で取引された奴隷数は、1万人以上にのぼると言われている²³⁾。また、時代は移るが、1563年のヴェネツィアのセンサスによると、全人口の7～8パーセントが奴僕(servants)のカテゴリーに入れられ、このなかには、自由人や年季奉公人などとともに奴隷も少なからず含まれていたのである²⁴⁾。

イタリア諸都市国家内では、家内奴隷ほど数は多くないが、職人や商人の下働きや下級船員として使役される奴隷が存在した。たとえば、ジェノヴァの機織り職人カッファライノは、5人の男奴隷と1人の女奴隷を所有していた²⁵⁾。女奴隷は、かれの身の回りの世話をし、男奴隷は、かれの作業場で徒弟として働いていたと思われる。しかし、一般に、かなり特殊な技能を要する作業に奴隷を使役することは、禁じられていた。たとえば、織り目の細かい生地 of 製造や薬剤調合などの職種である。イタリア半島では、農業やプランテーションで使役される奴隷は、ほとんどいなかったと思われる。

3 イベリア半島における奴隷制

8世紀から12世紀までの時代のイベリア半島(キリスト教圏)には、歴史的コ

23) 清水廣一郎, 前掲書, 99ページ。

24) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 106.

25) *Ibid.*, p. 100.

ンテキストの異なるふたつの奴隷制が存在した²⁶⁾。ひとつは、古代ローマ帝国や西ゴート王国の歴史的伝統を継承した形態で、奴隷身分として貶められたのは、主としてキリスト教徒であった。これにたいして、もうひとつは、ムスリム奴隷であった。キリスト教圏がイスラム教圏と境界を接するようになって以降、多くのムスリム奴隷が、キリスト教支配地域に存在するようになった²⁷⁾。前者は、北西部のアストゥリアス地方を除いて、12世紀ころには消滅したが、後者は、レコンキスタが激しくなるにつれて、拡大していった。多くの戦闘が、奴隷獲得を主目的として敢行された。たとえば、11世紀のアビラのレコンキスタの過程で捕獲された約200人のムスリム奴隷は、鎖に繋がれたままで、その町の城壁を建設する作業に使役された²⁸⁾。

ポルトガルでは、南部のアルガルヴェ地方が、13世紀中葉までに併合されて以降、イスラムとの境界が消滅した。それと同時に、奴隷供給源もなくなったが、時折カスティリアに侵入して、グラナダを攻撃し、奴隷を獲得した。また、和戦両用の手段で北アフリカから奴隷を連行することもあった。たとえば、ディニス王は、1317年にジェノヴァ人マヌエル・ペサニョ (Manuel Pesagno) に提督の称号を与え、モロッコ海域で私掠活動を行なうことを許可した²⁹⁾。王は、捕えた奴隷の5分の1を献呈された。

カスティリアやアラゴンにおいても、多くのイスラム教徒の捕虜が奴隷にされた。1212年のラス・ナバス・デ・トロサの戦いの際に捕えられた数千人にのぼるイスラムの敗残兵が、奴隷市場で売却された。13世紀中に、アラゴン王国は、バレンシアを併合し、カスティリア王国と同盟関係を結び、ルムシアを征服した。このとき、約2,000人の捕虜が獲得された³⁰⁾。アラゴン商人は、このころ南フランスに奴隷を輸出していたと言われている。

26) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 107.

27) もちろん、逆に、キリスト教徒も捕えられて、イスラム教支配地域で奴隷として使役された。

28) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 107.

29) これ以降、ポルトガルにおけるイタリア人の影響力が強化された (Verlinden, *op. cit.*, [The Beginnings], pp. 98-112, *op. cit.*, [Italian Influence], pp. 199-211).

30) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 109.

中世後期のイベリア半島における奴隷制は、その全域に広がっていたが、とくにイスラム教圏との境界領域では多数の奴隷が存在した。その形態は、イタリア都市国家の場合と同様、ほとんど家内奴隷であったが、それ以外に農業労働力としても使役された。地中海の貿易網に乗って、黒海沿岸やバルカン半島からイベリア半島に少数の奴隷が導入されることはあったが、その主流は、すでに述べたように、ムスリム奴隷であった。

4 砂糖産業と奴隷制

地中海世界の奴隷制にとっていまひとつ重要な点は、それと砂糖産業との関係である。しかし、これについてはすでに触れたことがある³¹⁾ので、ここではその概要だけを述べておくことにする。

甘蔗や砂糖の存在そのものについては、ヨーロッパのごく限られた一部の人が、古代ギリシア・ローマ時代から知っていたが、かれらが砂糖製造業に本格的に着手したのは、シリアやパレスティナ地域に樹立された十字軍王国においてであった。その後、13世紀末のこの王国の壊滅と同時に、クレタ、キプロス、シチリアなどの地中海島嶼にその逃亡者たちが移り住むようになって、砂糖産業は、島々の経済活動の重要な一部となった³²⁾。14世紀から15世紀にかけて、これらの島々での砂糖産業は、繁栄を誇っていた。

十字軍王国での甘蔗栽培の労働力は、主として現地シリア人のシェアクロッパーであり、砂糖産業で奴隷が使われたという記録は、いまのところ見当たらない。また、地中海島嶼の砂糖産業においては、奴隷が使役されていた確率はかなり高いと思われる。ギャロウェイは、「甘蔗栽培と奴隷制との関係は、クレタ、キプロスでは確実に進行した」と述べている³³⁾。しかし、奴隷労働が支配的な労働形態であったとは、いまのところ言えない。おそらく、賃労働者、

31) 前掲拙稿。

32) これらの島々には、イスラム教徒の支配下にあったときにすでに甘蔗や砂糖が導入されていた。

33) J. H. Galloway, "The Mediterranean Sugar Industry," *The Geographical Review*, Vol. 67, No.2, Apr. 1977, p. 190.

年季奉公人、奴隷などが併存していたのであろう。

イベリア半島でも甘蔗や砂糖は、早くから導入されていたが、砂糖産業が栄えるのは、やはり14、5世紀のことである。とくに南部のバレンシアやアルガルヴェ地方が、その中心であった。ここでも、奴隷労働は存在したであろうが、大規模に使役されたという証拠はない。

II 大西洋奴隷貿易の開始

1 ポルトガルのアフリカへの進出

15世紀にポルトガルがアフリカに進出する以前、イタリア人は、すでにサハラ越えのルートを通して運ばれてくる種々の交易品を求めて、北アフリカの諸港で貿易活動を営んでいた。主要な交易品は、金と奴隷であった。ジェノヴァ人たちは、モロッコの大西洋沿岸地域の探険に乗り出し、1162年にサレーに着いている。さらに、その約1世紀後の1253年には、サレーの南約225マイルにあるサフィまで航行している。1291年にジェノヴァ出身のかのヴィヴァルディ兄弟は、さらに南下しようとしたが、帰らぬ人となった。当時のジェノヴァ人の活動領域の南限は、モロッコまでであった。カスティリアも、貿易と漁業の範囲を拡大するために、アフリカに関心を抱いていたが、1492年までは国内統一の課題が優先した。

ポルトガルは、スペインに先駆けて13世紀に国内統合の夢を果たして以降、モロッコ沿岸地域を探索しはじめていた。1317年のベサニョの一件は、すでに触れた。ポルトガル王室に仕えていたジュノヴァ出身のランツァロット・マロチェルロ (Lanzarotto Malocello) は、1336年にカナリア諸島に上陸し、その原住民グアンチ族を捕えた。その後1世紀近くにわたるモロッコ海域での活動を通じて、ポルトガルは、北アフリカの経済的重要性を認識するようになった。

ポルトガルは、1415年に、北アフリカ市場に通じる拠点を確保するために、ジブラルタル海峡の南岸にあるセウタを攻撃した。さらに、その後20年のあいだにアゾーレス諸島とマデイラ諸島を支配領域に組み入れた。1434年には、ジ

ル・エアネス (Gil Eannes) を艦長とするポルトガル船団が、ボジャドール岬を越えた。この事件が、その後ポルトガルが西アフリカへ進出する突破口となった。

ポルトガルのアフリカ進出の動機について、ボクサーは、次の4点を挙げている。(i)イスラム教徒にたいする十字軍的敵対意識。(ii)ギニアの金にたいす欲望。(iii)プレステ・ジョアン³⁴⁾の探求。(iv)東洋の香料の探査。(i)と(iii)は、イスラム教にたいするキリスト教側の巻き返しを意図した宗教的動機であり、(ii)と(iv)は、地中海ルートに代わる大西洋ルートを発見し、経済的権益を獲得しようとする動機である。聖俗両方の動機が入り混って、ポルトガルは、「大航海時代」に突入したのである。³⁵⁾

そして、ポルトガルは、実際に西アフリカの金、インドの香料を獲得し、一大海洋帝国を築きあげたのである。そのための条件として、すでに述べた通り、ポルトガルがいちはやく国内統一を成就したこと、大西洋に乗り出すための有利な地理的位置にあったこと、しかも、地中海と北ヨーロッパを結ぶ要衝であり、イタリア商人の商業的伝統を受け継いだこと、アヴィス王朝成立(1385年)を契機に旧貴族の勢力が排除され、冒険心に富む新興勢力が台頭したことがあげられる。井沢実氏は、それ以外に、カスティリアとの対抗意識や十字軍騎士団のひとつ「テンプル騎士団」が保有していた莫大な財産を探検費に流用できたことをあげている³⁶⁾。

34) プレステ・ジョアンとは、中世ヨーロッパのキリスト教徒がアジアのどこかにいると信じていた強大なキリスト教王のことである。中世末になると、その王は、アフリカのどこかにいると信じられていた。

35) C. R. Boxer, *The Portuguese Seaborne Empire 1415-1825*, London: Hutchinson & Co. Ltd., 1969, p. 18. なお、アズララは、エンリケ親王が、アフリカ探検を支援した目的を5つあげている。(1)カナリア諸島なびにボジャドール岬の南に陸地があることを確認すること。(2)アフリカの特産品を本国に持ち帰ること。(3)アフリカでのイスラム教徒の勢力を調査すること。(4)プレステ・ジョアンを探し求めること。(5)アフリカでキリスト教を広めること (G. F. de Azurara, *Chronica do Descobrimento e Conquista de Guiné*, Paris, 1841, アズララ著、長南実訳「ギネー発見征服誌」大航海時代叢書 第1期第2巻『西アフリカ航海の記録』岩波書店、1967年、156-158ページ)。

36) 井沢実「大航海時代の先駆者ポルトガル」大航海時代叢書 第1期第2巻『西アフリカ航海の記録』岩波書店、1967年、62-70ページ。

2 初期の奴隷貿易の形態

ところで、ポルトガルは、アフリカ進出の当初からその目的のひとつとして奴隷確保を掲げていたわけではない。しかし、アフリカの大西洋沿岸を南下し、アフリカ内部の事情に通じるようになるにしたがって、大西洋奴隷貿易は、ポルトガルの経済活動の重要な一部になっていったのである。しかも、15世紀中葉になると、イタリア商人は黒海から締め出され、また、イベリア半島のレコンキスタが終幕を迎えつつあったために、奴隷の供給が涸渇するというヨーロッパ側の事情もあった。

こうして、1441年にアンタン・ゴンサルヴェス (Antão Gonçalves) を船長とする船が、モーリタニア北部のリオ・デ・オロ (Rio de Oro) に上陸し、あざらしの皮と油脂のほかに、当地に住むアゼネゲ族の男女各1名を捕えた³⁷⁾。また、そのすぐあとにヌーノ・トリスタン (Nuno Tristão) と合流し、さらに10名のアゼネゲ族を捕え、ラゴスに連れ帰った。これが、大西洋奴隷貿易に先鞭をつけた事件として知られている³⁸⁾。

こうして捕えた12名のうち3名は、アゼネゲ社会のなかでの身分が高く、もし、自分たちを当地に連れ戻してくれるならば、それと引き替えに自分たち1人につき5、6名の黒人奴隷を引き渡すことができる旨を伝えた。黒人は、アゼネゲ社会において奴隷として使役されている、と言うのである。ゴンサルヴェスは、捕虜の交換によって利益を得るというよりも、むしろ、その情報が正しいかどうかを調べるため、再度かの地に赴いた。そこで3人のうち1人には逃げられたが、残りの2人と交換に10人の黒人奴隷を獲得した。このとき、それ以外に少量の金、盾、だちょうの卵も手に入れた。こうして、ポルトガル人は、アフリカには黒人奴隷と金が存在することを実際に確認できたのであ

37) アズララ、前掲訳、176-181ページ。なお、アゼネゲ族は、西サハラからモーリタニア地域に居住したハム系の言語をもつベルベル人の一種族である（川田順造「15世紀のアフリカと地中海世界」大航海時代叢書 第1期第2巻『西アフリカ航海の記録』岩波書店、1967年、53-58ページ）。

38) A. J. R. Russell-Wood, "Iberian Expansion and the Issue of Black Slavery: Changing Portuguese Attitudes, 1440-1770," *The American Historical Review*, Vol. 83, No. 1, Feb. 1978, p. 16.

る³⁹⁾。

1443年には、先のヌーノ・トリスタンが、プランコ岬に到着し、その南方のジェテ島⁴⁰⁾付近で29人の捕虜を獲得した。翌年、ラゴスの徴税官(アルモシャリフエ)であったランサローテ・デ・フレイタス(Lanzarote de Freitas)を提督とする船団6隻が出発した。プランコ港から南方約150キロメートルにわたるいわゆるアルギン礁で合計235人にのぼる捕虜を獲得した⁴¹⁾。この大部分は、アゼネゲ族であったが、少数の黒人も含まれていた。捕虜のうち5分の1(46人)は、エンリケ親王へ献呈され、残りは、ラゴス郊外でのオークションで売却された。

このランサローテらの遠征の目的は、ゴンサルヴェスのそれと比べると、きわめて経済的動機の強いものであった。後者の場合には、捕虜＝奴隷の獲得は、主として当地の事情に関する情報を収集するためであったのにたいして、前者では、奴隷売買による利益を主目的とするものであった。そして、これ以降、この傾向がより一層強まっていくことになる。

ところで、1440年代においては、奴隷は、武力行為を通じて獲得された。これは、イベリア半島でのレコンキスタやセウタ攻略などの先例を踏襲するものであった。すなわち、キリスト教徒のイスラム教徒にたいする十字軍的熱情を実践するいわば「正義の戦争」なのであった⁴²⁾。その頂点にあって、この戦いを指導したのが、すでに触れたエンリケ航海王子であった。アズララが「西アフリカ航海の記録」をしたためようとした本質的な動機は、この親王の聖なる

39) アズララ、前掲訳、192-197ページ。

40) のちにアルギム(Arguim)島と呼ばれた。この島は、ポルトガルのアフリカ進出史上重要な意味をもつことになった。なぜなら、ここには奴隷、金などの交易品が集まってきたばかりではなく、周辺地域や西アフリカの情報も伝達されたからである。なお、ここに砦が建設されたのは、1448年のことである。

41) 他の5隻の船長は、ジル・ニアネス、エステヴァン(ステヴァン)・アフォンソ、ロドリゴ・アルヴァレス、ジョアン・ディアス、ジョアン・ベルナルデスであった。

42) アズララ、前掲訳、225ページ。

43) 初期のアフリカ航海者のなかには、セウタ攻撃に参加した騎士が少なからず含まれていた。たとえば、ジョアン・ゴンサルヴェス・ザルコやヌーノ・トリスタンなどである。

実践の榮譽を讃えることにあった⁴⁴⁾。したがって、捕虜＝奴隷の獲得は、こうした聖戦の副産物であったわけである。けれども、時代を経過するにしたがって、こうした聖的動機は希薄になり、実利的目的が優勢になっていった。

アズララの記録をもう少し追ってみよう。

ランサローテの大規模な遠征ののち、アゼネゲ族の白人（ポルトガル人）にたいする警戒心と対抗意識は、次第に高まった。ランサローテの船団が帰還した直後、ゴンサーロ・デ・シントラを船長とするカラヴェラ船が、セネガル川以南の地域に向かう途中、アルギン島付近で捕虜を獲得しようとしたが、乗組員13人のうちかれも含めて8人が、逆にアゼネゲ族との戦闘で殺された⁴⁵⁾。おそらく、これが、ボジャドール岬以南の地域でポルトガル側に被害が出た最初の事件であろう。

これ以降も、アルギム礁周辺を中心に、数多くの船がラゴスから出航したが、獲得できた奴隷は、せいぜい数十人程度で、ランサローテの事例ほど多数獲得することはできなかった。1441年から1448年までの時期にポルトガルに連行された奴隷数は、927人であった⁴⁶⁾。これは、年平均で116人である。

この間に獲得された奴隷の大部分は、アゼネゲ族であって、黒人奴隷の数はまだ少なかった。さらに、奴隷獲得の方法は、すでに述べたとおり、直接武力に訴える奴隷狩りが主流であった。

しかし、アゼネゲ族との交渉を通じて、「平和的」な手段によって奴隷を獲得した事例が、この時期に皆無であったというわけではない。また、当初期待していたほど成果はあがらなかったにせよ、セネガル川以南の黒人社会との接触も、この時期に始まっている。

1444年の遠征の際にオウロ川に残留し、アゼネゲ族と7ヶ月間生活を共にし

44) 「殿下（エンリケ親王——筆者）の御功業が有意義な目的のもとに〔実り多き結果をもって〕永久に書きのこされますならば、殿下の名声を高め、殿下の思い出は栄光に輝くことでありましょうし、かつはまた殿下を見習おうとすべての王公たちに対し有益な教訓ともなるでありましょう」（アズララ、前掲訳、125ページ）。

45) アズララ、前掲訳、237ページ。

46) アズララ、前掲訳、472ページ。

たジョアン・フェルナンデスを迎えにいくために、先のゴンサルヴェスが出港したのは、その翌年であった。かれは、目的地に着くと、フェルナンデスからある人物が黒人奴隷を売却しようとしていることを聞き、取引に応じた。かれは、ポルトガルから持ち込んできた品物を9人の黒人ならびに少量の砂金と交換した。

また、アルギム礁を越えて、黒人居住地域に辿り着いた最初の人物は、リスボン在住のディニス・ディアスであろう⁴⁷⁾。かれは、1444年末にセネガル川を越えて、ヴェルデ岬まで到達している。このとき、かれは、ウォロフ族⁴⁸⁾と思われる捕虜を4人獲得した。

その後、ポルトガル人のうち何名かがヴェルデ岬を越えたが、目立った成果をあげることはなかった。というよりも、逆に黒人たちの反撃に会い、人命をはじめ多大な損失を被ったのである。たとえば、先のヌーノ・トリスタンは、ヴェルデ岬から60レグア南下したところで黒人を捕えようとして、反対に殺された⁴⁹⁾。

3 大西洋奴隷貿易の制度化

ポルトガルのアフリカへの進出が、キリスト教徒のイスラム教徒にたいする「聖戦」の一環として位置づけられるならば、そのなかでポルトガル側に多少の犠牲者が出たとしても、その人は殉教者として称賛されたであろう。しかし、この戦いの副産物たる奴隷の獲得という俗事的目的が強まるにつれて、味方の側の損失が大きく、かつ、奴隷獲得の効率が低い武力的な奴隷狩りにたいする疑念が、次第に大きくなってきた。

47) アズララ、前掲訳、246-249ページ。

48) セネガル川を境に、北はアゼネゲ族（褐色人種）、南はウォロフ族（黒色人種）が住んでいた。後者は、「真黒な肌の、背の高い、がっしりとしたからだつきの人種」である、と記されている（A. da Cá da Mosto, *Le Navigazioni Atlantiche di Alvise da Cá da Mosto*, Milano, 1928 [カダモスト著、河島英昭訳「航海の記録」大航海時代叢書 第1期第2巻『西アフリカ航海の記録』岩波書店、1967年]、524-527ページ）。

49) アズララ、前掲訳、430-431ページ。

こうして、ヴェネツィア出身のカダモストが、エンリケ親王の勧めで西アフリカに赴いた1455年ころには、アルギン砦は、アゼネゲ族やアラブ商人とポルトガルとの主要な交易拠点となっていた。これ以前に、親王は航海者たちに、アゼネゲ族に危害を加えてはならないと命じていた⁵⁰⁾。

ところで、アルギム東方約350マイルの内陸部にあるワダン（オーデン）は、サハラ以南の黒人アフリカ社会と北アフリカとを結ぶ交易路の中継地点であった。ポルトガルが、1448年にアルギム島に砦を築いて以降、ワダンからこの島に交易品がもたらされるようになった。こうして、小麦、布地、銀などと交換に、ポルトガル人は、奴隷や金を得ることができた。1450年代中葉にアルギムからポルトガルへ運ばれた奴隷の数は、毎年700～800人である、とカダモストは記している⁵¹⁾。

かれは、アルギム砦をさらに南下し、セネガル川からガンビアまで足を延ばした。このとき、かれが見聞したのは、次のとおりである。

ウォロフ族のセネガ王国では、王は、ときどき周辺地域を侵略し、その際獲得した捕虜を奴隷として使役する。奴隷は、種々の用途に使われるが、主として土地の耕作に使われている。また、ここにやってくるアラブ人やアゼネゲ族の商人に売却される奴隷の数も多い。最近では、この付近で交易をはじめたキリスト教徒にも奴隷が売却されることもある。⁵²⁾

以上の叙述から、黒人王国とポルトガル商人とのあいだで行なわれた奴隷貿易の輪郭が浮んでくる。すなわち、現地の王国は、周辺地域との戦闘の過程で捕えた者を奴隷として使役していたこと、また、その一部を外国商人に売りわたしたこと、そのなかにポルトガル商人も含まれていたことがわかる。実際、カダモストも、ウォロフ族のなかのひとつの王国ブドメル（カヨール）の国で、馬具つきの馬7頭（300ドゥカード）と交換に数十人の奴隷を手に入れた⁵³⁾。

50) カダモスト、前掲訳、512ページ。

51) カダモスト、前掲訳、511ページ。

52) カダモスト、前掲訳、529ページ。

53) 当時、馬1頭と黒人奴隷9～14人とが交換できたので、かれは、おそらく60～100人の奴隷を獲得したと思われる。

ところで、エンリケ親王は、その存命中奴隷貿易を含むアフリカ全体の貿易を独占していた。教皇ニコラス5世は、1455年にボジダール岬以南のアフリカの大西洋岸の征服と貿易独占権がポルトガル王国に属することを認めた。こうして、エンリケ親王は、かれが他界する1460年まで、アフリカに向かった合法的航海の3分の1を自ら組織した⁵⁴⁾。他方、取引量の5分の1を親王に献呈するという条件(5分の1税)でかれから許可をもらった者たちが、それ以外の航海を組織したのである。

エンリケ親王の時代には、ポルトガルは、セネガルからガンビア(セネガンビア)地域まで歩を進めたが、かれの死後、その活動領域は、さらに拡大した。1462年にビエトロ・ダ・シントラは、シエラ・レオネまで到達した⁵⁵⁾。1466年にはカーボ・ヴェルデ諸島サンティアゴ島に砦が建設され、セネガル川からパルマス岬までのいわゆる上ギニア地域における貿易拠点となった。黄金海岸にサン・ジョルジュ・ダ・ミナ砦が建設されたのは、1482年のことであった。この砦は、当初金貿易の拠点であった。翌年、さらに南のコンゴ王国が、ポルトガル人によって「発見」された⁵⁶⁾。下ギニアのベニンやコンゴ王国で獲得された奴隷の収容所として、また砂糖プランテーションの基地としてサン・トメ島が平定されたのは、1493年のことであった。こうして、ポルトガル王国は、セウタ攻略から4分の3世紀のあいだに、アフリカ大西洋岸に着々と貿易拠点を開発し、ヨーロッパで初めてサハラ以南のアフリカにその影響力を行使しえたのである。

話を元に戻せば、エンリケ親王死後、ポルトガルの対アフリカ貿易権は、王室の手に移ったものの、その中心的存在を失ったことで、貿易活動が少なからず混乱したことは想像するに難くない。しかし、王室も、次第にアフリカ貿易の重要性を認めるようになり、その体制の整備に向かった。1469年の末にアフ

54) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 138.

55) カダモスト, 前掲訳, 597-607ページ.

56) F. Pigafetta, *Relazione del Reame di Congo et delle Circonvicine Contrade*, Roma, 1591.
(ビガフェッタ著, 河島英昭訳「コンゴ王国記」大航海時代叢書 第2期第1巻『ヨーロッパと大西洋』岩波書店, 1984年, 327-552ページ).

ォンソ5世は、リスボン在住の有力な商人フェルナン・ゴメス (Fernão Gomes) にシエラ・レオネ以南の探險と貿易の独占権を与えた⁵⁷⁾。ゴメスは、この契約で毎年200ミルレアイスを王室に納めること、また、沿岸の未開拓地を毎年100レグア(560~600キロメートル)以上探險することを義務づけられた。こうして、1475年までの契約期間中に、ゴメスが派遣した探險隊は、シエラ・レオネからビアフラ湾に至る下ギニア全域を航行し、可能ならば貿易活動も展開した。この主な地域は、黄金海岸、ニジェール・デルタとベニン地域、フェルナンド・ポー、プリンシペ、サン・トメ島であった。

そのなかでも金貿易については若干触れておく必要があろう。1471年1月にゴメスは、ギニア湾に2隻の船を派遣した。船長らは、象牙海岸を越え、さらに東に進んだところで象牙や食料のほかになりに多くの金を手に入れることができた⁵⁸⁾。このとき、かれらは、この近辺に大きな金鉱が存在することを確認したのである。実際には、金の産出地域は奥地であって、ポルトガル人がそこまで入り込むことはできなかったけれども、現地の仲介人を通じて金を獲得することが可能になった。この以降、この海岸は、黄金海岸 (Costa da Mina) と呼ばれるようになった⁵⁹⁾。

1481年に即位したジョアン2世は、アフリカ貿易に強い関心を抱き、王位を継承するとすぐにアフリカの貿易独占権を王室の名において留保し、輸出入品の管理を徹底させようとした。アフリカからの輸入品のなかでは、金、奴隸、マラゲータ・ペパー、象牙がとくに重要であった。奴隸や象牙の貿易権は、王室に近いごく限られた人にしか譲渡されなかった。また、金貿易は、さらに制限が厳しかった。輸出品目のなかには、馬、小麦、カーペット、布地、銅や真鍮などの金属製品、プレスレットやビーズなどが含まれていた⁶⁰⁾。

57) Phillips, Jr., *op. cit.*, p. 142; Boxer, *op. cit.*, p. 29.

58) J. Vogt, *Portuguese Rule on the Gold Coast 1469-1682*, Athens: The Uni. of Georgia Press, 1979, p. 7.

59) ポルトガルの黄金海岸における金貿易に関する邦語文献として、金七紀男「中世末におけるスーダンの金とポルトガル」『東京外国語大学論集』第31号、1981年3月、299-315ページ、がある。

こうした王室の貿易独占は、しばしば侵害された。密貿易は、常に合法貿易と共存しうるものである。船員が私的な取引を行っていたし、王室役人や代理人が、自らの地位を利用して密貿易に関与することもあった。また、カスティリア商人が、これに加わっていたという事実もある。

ポルトガル商人や国外追放者（デグレダード）のなかには、アフリカの内陸部深く入り込み、黒人部落に住みつくものがいた。とくに上ギニアには、こうしたタンゴス・マオス（tangos-maos）、あるいはランサードス（lançados）と呼ばれる人々が多数存在した。かれらは、現地の女性と結婚し、数多くの子孫を残した。こうした人々が、ポルトガルとアフリカとのあいだの貿易の仲介役として重要な役割を果たしたのである。

こうして、1440年代から開始された大西洋奴隷貿易は、ポルトガル人のアフリカ社会への影響力が強まるにつれて、取引される奴隷数が増加し、王室財政を支える重要な一部となった。そこで、ポルトガル王室は、1486年に「リスボン奴隷局」（Casa dos Escravos de Lisboa）（以下奴隷局と略す）を創設し、奴隷貿易をアフリカ貿易のなかで独立した1部門として統制しようとした⁶¹⁾。この組織は、金をはじめアフリカ貿易全体を掌握するための王室組織「ギネー商務院」（Casa da Guiné）の支部機関であった。

この奴隷局には、3つの任務があった。まず第1の任務は、アフリカからリスボンに運び込まれた奴隷の管理である。荷揚げされた奴隷を受け取り、検査し、標準価格をつけ、オークションを開き、売り捌くという業務である。第2に、奴隷局は、奴隷貿易を営む意向をもつ個人や団体に貿易許可証を発行し、

60) ポルトガルがアフリカで取引に使用した品物の多くは、外国産であった。たとえば、モロッコ、大西洋島嶼、北ヨーロッパ産の小麦、イギリス、アイルランド、フランス、フランドル産の布地、ドイツ、イタリア、フランドル産の真鍮製品やガラスビーズなどである。また、アフリカからの輸入品の多くが、北ヨーロッパやスペイン、イタリアなどに再輸出された。とくに重要なことは、1457年に鑄造されたクルゼード金貨が、外国産品の支払いのためにヨーロッパ中に広がったことである（Boxer, *op. cit.*, pp. 30-31）。

61) J. Vogt, "The Lisbon Slave House and African Trade, 1486-1521," *Proceedings of the American Philosophical Society*, Vol. 117, No. 1, Feb. 1973, pp. 1-16. なお、奴隷局の施設は、奴隷収容所、事務所、造船作業所から成り立っていた。

特許料を受領した。

第3の任務は、種々の王室輸入関税の徴収である。一般に、アフリカから直接リスボンに輸入されたすべての品物（奴隷を含む）には、20分の1税（Vintena）、すなわち、5パーセントの税金がかけられた。したがって、王室が直接関与し、獲得した奴隷にも形式上はこの税金がかけられたことになる。王室許可状によって貿易を営むそれ以外の個人営業者には、4分の1税（quarto）、すなわち、25パーセントの税金がかけられた。こうした税は、現金でよりも奴隷そのもので支払われる場合の方が多かった。

ただし、1530年ころまでは、アフリカから直接リスボンに運ばれてくる奴隷よりもアルギム、サンティアゴ、サン・トメの各砦を経由して運ばれてくる奴隷の方が多かった。こうした島々には王室が任命した関税請負業者がおり、かれらが徴税業務を遂行していた。

4 輸入奴隷数と王室収入

大西洋奴隷貿易が開始された1440年代から16世紀中葉までに、ポルトガルがアフリカから輸入した黒人奴隷の人数は、ことの性質上正確には把握できない。しかし、この約1世紀のあいだに、輸入数量は、年による変動が激しかったものの、徐々に増加していったことは確かである。とくに、16世紀初頭以降、奴隷の取引量は、飛躍的に増大した。

すでに述べたとおり、1440年代には年平均で100人を少し上回る程度の奴隷が、ポルトガルに輸入された。ただし、この奴隷の大部分は、黒人ではなくアゼネゲ族であった。同じく50年代になると、その数は、毎年700～800人程度に増加した。しかも、奴隷の主流は、この時期に黒人に転換した。次の70年代から80年代中葉までの記録は、残っていないが、この時期にポルトガルのアフリカへの影響力がさらに強化されたことから推察すれば、50年代と同程度かそれ以上の奴隷が、ポルトガルに輸入されたと思われる。

奴隷局が創設された1486年に、ポルトガル王室は、リスボン在住のフィレン

ツェ商人バルトロメオ・マルキオニ (Bartolomeo Marchioni) にたいしてベニン地域の貿易独占権を付与した⁶²⁾。期間は、1486年6月15日から1493年末までであった。マルキオニは、このために平均すると毎年110万レアイスの特許料を王室に払い込んだ。この契約期間中に、かれは、1,648人の奴隷をポルトガルに連行した。同期間に奴隷局を通じて輸入された全奴隷数は、3,589人であったので、かれの取引数量は全体の約46パーセントにものぼったことになる。したがって、奴隷局を通じてポルトガルに輸入された奴隷数は、単純平均すると毎年約550人になるが、奴隷局を通らなかった奴隷数を含めると、この人数の数倍になると思われる⁶³⁾。

第3表 アルギムからリスボンに輸送された奴隷数 (1501-1520年)

年	船積み奴隷数 (アルギム)	荷揚げ奴隷数 (リスボン)
1501	145	143
1505	63	54
1506	177	n. a.
1507	52	n. a.
1508	86	45+?
1510	60	n. a.
1511	102	97
1512	234	224
1513	442	432
1514	303	299
1515	301+?	589
1516	878	771
1517	864	853
1518	1,481	1,410
1519	1,939	1,884
1520*	342	339

〔備考〕 *1520年は、1月から8月11日までの人数である。

〔資料出所〕 Saunders, *op. cit.*, p. 22, によって作成。

16世紀に入ると、断片的ではあるがもう少しまとまった資料が、サンダースによって得られている。第3表は、16世紀初頭におけるアルギムからリスボンへ運ばれた奴隷数を示している。これより、アルギムで船積みされた奴隷数は、1510年代中葉以降急増していることがわかる。ちなみに、16世紀の最初の10年間は、全般的に奴隷貿易の不振期であった。アルギムからリスボンまでの航海日数は、当時約2週間であったので、航海途上の死亡率は比較的低かった。

62) Vogt, *op. cit.*, p. 4, p. 7, p. 14.

63) サンダースは、1490-1516年の期間に奴隷局を通じて輸入された奴隷数は、毎年300~700人であったが、リスボンに輸入された全奴隷数は2,000人であった、と述べている (Saunders, *op. cit.*, p. 21)。

1516-19年までの4年間をとると、その死亡率は、4.7パーセントである。

つぎに、第4表は、カーボ・ヴェルデ諸島のサンティアゴに荷揚げされた奴隷数を示したものである。かなり断片的な資料ではあるが、アルギムの場合と同様に、10年代中葉以降、取引された奴隷数が増加していることがわかる。このほとんどが、リスボンに送られたと思われるが、マデイラ諸島やカナリア諸島に送られ、その砂糖プランテーションで使役された奴隷もいたであろう⁶⁴⁾。

アルギム砦とサンティアゴ砦に収容された奴隷の大部分は、モーリタニアから上ギニアまでの地域で獲得された奴隷である。16世紀前半にこの地域で獲得された奴隷数は、両砦を経由しないで直接リスボンに送られた奴隷も含めると、おそらく年間高々3,500人程度であったと思われる⁶⁵⁾。

他方、サン・トメ島に収容された奴隷は、1520年代の後半には年間2,000～3,000人にのぼっていたが、そこからリスボンに送られた奴隷数は、多い場合でも年間数百人程度であった(第5表)。下ギニアやコンゴからサン・トメ砦に収容された奴隷の多くは、15世紀前半に黄金海岸のサン・ジョルジュ・ダ・

第4表 サンティアゴに荷揚げされた奴隷数(1513-1528年)

年	奴 隷 数
1513*	565
1514	978
1515	1,423
1528	1,484

〔備考〕 *1513年は、7月から12月までの人数である。

〔資料出所〕 Saunders, *op. cit.*, p. 20, によって作成。

第5表 サン・トメからリスボンに輸送された奴隷数(1515-1534年)

年	船舶数	船積み奴隷数 (サン・トメ)	荷揚げ奴隷数 (リスボン)
1515	1	78	n. a.
1518	1	70	n. a.
1525	1	30	24
1526	2	281	195
1527	1	50	42
1530	1	160	111
1532	2	200	n. a.
1533	5	530	n. a.
1534	5	260	n. a.

〔資料出所〕 Saunders, *op. cit.*, p. 21, によって作成。

64) 前掲拙稿, 209-220ページ。

65) Saunders, *op. cit.*, p. 20.

ミナ砦に送られ、そこで金と交換されたのである⁶⁶⁾。かれらは、金その他の荷物を運ぶポーターとして使役された。また、サン・トメ島自身の砂糖プランテーションでも多数の奴隷が使役されていた。さらに、1530年代以降、この島からスペイン領アンティル諸島への奴隷供給が増加した⁶⁷⁾。

以上のことから、15世紀前半にポルトガルが獲得した奴隷数は、モーリタニアから上ギニア地域で年間最高で3,500人、下ギニアならびにコンゴ地域から同じく2,000人程度であったであろう。リスボンに送られた奴隷は、このうち約2,000人であったと思われる。しかも、上ギニア、モーリタニアからの奴隷が、そのほとんどを占めていた。

ポルトガル国内では、リスボン以外の港にも多少の奴隷が輸入されたが、その数はきわめて少なかったと思われる。たとえば、エンリケ親王時代に奴隷受け入れ港の中心であったラゴスには、15世紀末から16世紀初めにかけて年間100人以下の奴隷が入っただけである。その他の地方の港に入った数は、さらに少なかったであろう。

ところで、リスボンに輸入された奴隷の約半数は、外国に再輸出された。このうち最大の輸出先は、スペインで、とりわけセビーリャからパレンシアにかけての南部沿岸地域への輸出が多かった。そのほか、イタリアやフランドル地域へも少数の奴隷が輸出された。なお、スペインへ再輸出された奴隷のなかには、セビーリャを経由してスペイン領アメリカへ運ばれた奴隷も含まれている。

アルギムで購入された奴隷985人の年令別構成や性別構成ならびにその1人当りの平均価格を示した第6表をみると、次のことがわかる。まず、性別による価格差は、ほとんどみられないのにたいして、年令による価格差は、明白に

66) J. Vogt, "The Early São Tome-Principe Slave Trade with Mina, 1500-1540," *The International Journal of African Historical Studies*, Vol. 6, No. 3, 1973, pp. 453-467.

67) スペイン領アメリカへの奴隷貿易については、拙稿「アシエント奴隷貿易史——イギリス南海会社のスペイン領アメリカへの奴隷貿易を中心にして——」(1)(2)『経済学論叢』(同志社大学)第36巻第2号, 第3・4号, を参照。

第6表 アルギムで購入された奴隷の年令、性別構成と価格

(1519年5月-1520年3月)

年 令	奴 隷 数 (%)	性別奴隷数 (%)		平均価格*
3-7	43 (4.4)	男 子	20 (3.6)	900
		女 子	23 (5.4)	1100
8-12	116 (11.8)	男 子	76 (13.7)	1600
		女 子	40 (9.3)	1600
13-17	184 (18.7)	男 子	106 (19.1)	2500
		女 子	78 (18.2)	2500
18-22	344 (34.9)	男 子	207 (37.2)	3400
		女 子	137 (31.9)	3200
23-27	158 (16.0)	男 子	94 (16.9)	3200
		女 子	64 (14.9)	3000
28-32	113 (11.5)	男 子	41 (7.4)	2700
		女 子	72 (16.8)	2400
33-37	16 (1.6)	男 子	9 (1.6)	1400
		女 子	7 (1.6)	1100
38-42	11 (1.1)	男 子	3 (0.5)	700
		女 子	8 (1.9)	900
計	985 (100.0)	男 子	556 (100.0)	2700
		女 子	429 (100.0)	2700

〔備考〕 * 奴隷1人当りの価格は、1ドブラ≒225レアイスとして、レアイス単位で表示。

なお、幼児を抱える母親は、幼児も含めて女子1人として算定。

〔資料出所〕 Saunders, *op. cit.*, pp. 24-25, によって作成。

存在していることである。18才から27才までの男女の奴隷の価格が最高で、7才以下あるいは38才以上の奴隷価格が最低であり、そのあいだの価格差は、約3倍であった。また、この表のサンプル数全体のなかで、13-32才の奴隷の占める比率は約80パーセントであり、男子の占める比率は約56パーセントであった。

つぎに、リスボンにおける奴隷価格を示した第7表をみると、15世紀中、クルザード金貨表示ではほとんど価格変動はないが⁶⁸⁾、国内通貨として使われていたレアル表示では価格が上昇したことがわかる。1500年から1550年までの時期に奴隷価格は、3倍に上昇しているが、これは、海外からポルトガルへの輸入品価格の一般的傾向であった。たとえば、胡椒の価格は、1500年から60年までの時期に約2倍に上昇している。その他、内外の奴隷需要が高まったことも、価格上昇の原因のひとつ

第7表 リスボンにおける奴隷価格の推移 (1460-1590年)

年	価 格 (レアル)	価 格 (クルザード)
1460	3,000	12
1500	5,000	12.5
1510	7,000	17.5
1520	8,000	20
1530	8,000	20
1540	15,000	37.5
1550	15,000	37.5
1552	45,000-50,000	112.5-125
1580	15,000-30,000	37.5-75
1590	20,000-30,000	50-75

〔備考〕 貨幣換算は、1460年については1クルザード=253レアル、その他の年については1クルザード=400レアルとして計算。

〔資料出所〕 Saunders, *op. cit.*, p.27, によって作成。

つとして考えられる。とくに、1550年代の急激な価格上昇は、イスパノアメリカの需要が急増したことと関係がある。しかし、その後アンゴラ地域が新たに奴隷供給地に加えられたこともあって、16世紀終りころまでに奴隷価格は、高めに安定化した。

最後に、奴隷貿易がポルトガル王室財政に果たした役割について、若干触れておきたい。

奴隷局の収入は、その創設当初から16世紀前半にかけて、取引された奴隷数の増加や価格上昇のために急増した。フォークトによれば、1486-93年の時期における奴隷局の平均年間収入は、約220万レアルであったが、1511-13年の時期にそれは、900万レアルに増加し、さらに、1515-16年の時期には2,100万レアルに伸びたのである⁶⁹⁾。奴隷局の収入のなかには砂糖や象牙などの奴隷以外の輸入品目も含まれていたが、この間の収入増加の大部分は、奴隷貿易の

68) Vogt, *op. cit.*, (*The Lisbon Slave House*), p.13.

拡張に依存していたのである。1520年代以降、奴隷局の収入は、それまでの時期の伸び率と比べると低下したものの、着実に増加し、1559年における収入は、3,470万レアイスに達した⁶⁹⁾。

他方、16世紀初頭のインド香料貿易の収入は、年間約40万ドゥカード（1億6000万レアイス）であり、同時期のミナ金の貿易の収入は、約12万ドゥカード（4800万レアイス）であった⁷⁰⁾。16世紀前半における両者の収入は、年により多少の変動はあるものの、概してこの程度の規模で推移した。収入面からみれば、奴隷貿易は、インド香料貿易に比べるとはるかに及ばなかったものの、16世紀中葉までにミナ金の貿易にほぼ匹敵する規模に達していた。換言すれば、奴隷貿易は、王室財政を支える重要部門のひとつとなっていたのである。

さらに重要なことは、大西洋黒人奴隷貿易は、13世紀中葉以降衰退しつつあったポルトガル王国における奴隷制に息を吹き込み、それを復活させたということである。16世紀中葉までにリスボン、ヨーロッパでもっとも奴隷人口の多い都市になっていた。さらに時代を先取りするならば、ポルトガルがその先鞭をつけた奴隷貿易は、南北アメリカにおけるヨーロッパの植民地体制の社会経済的基盤として黒人奴隷制を成立させたひとつの重要な契機となったのである。

（以下、次号）

69) Saunders, *op. cit.*, p. 33.

70) *Ibid.*, p. 32.